

先生と生徒

辻 憲男（文学部教授）

「丹波篠山山家（やまが）の猿が、花のお江戸で芝居する」「デカンショデカンショで半年暮らす、あとの半年ゃ寝て暮らす」。デカンショ節が全国的に知られるようになったのは、明治30年代のことだという。確かに、姫路出身の和辻哲郎も、旧制一高の寮でそれを「ほとんど毎日のように聞いた」。和辻の父はかつて篠山の漢学塾で学んだが、後々も恩師の書を額に入れて掲げ、見上げつつ「非常な尊敬の態度をもって語った」（『自叙伝の試み』）。「鳳鳴の塾で文武きたえし美少年」の歌詞は、この地の青雲の気風をいうのでもあろう。

明治29年（1896）、山田孝雄（やまだよしお）は私立鳳鳴義塾に赴任した。弱冠21歳、ニキビづらの中学生に国文法を教えた。教科書に「は」は主語を示すと書いてあった。すると、「一生反問して『は』の主語以外のものを示すことを以てす。余は懺悔す。当時の狼狽（ろうばい）赤面いかばかりぞや。沈思熟考して、おもむろにその言の理あるをさと、自らその生徒に陳謝したる事ありき」。一週間考えて、教科書の誤りであることを伝えた。一生徒の質問が先生を変えた。ここに山田は発憤激励、ぜひ30歳までに一学説を樹立せんと決心した。まさに、余が国語研究の道に進んだ「最大動機」であった（『日本文法論』）。

山田は富山市の出身。独学で小学校訓導になり、かたわら中学教員免許を取得した。後に“山田文法”の体系をうち立て、著書百余冊、東北大学等で古典学を講じた。谷崎潤一郎は源氏物語の全訳に際し、山田を校閲者として敬仰した。



兵庫県篠山市の篠山城跡。鳳鳴義塾は北堀にあった。